真の教育者とは

旧知の沖縄研究者・阪井芳貴さんはフェイスブック「仲間」である。先日、阪井さんが標題のようなコメントを書いていた。朝日新聞 2 月 26 日朝刊の政治断簡「野仏と、泡盛のヨーグルト割り」についての感想だ。私もこの記事に注目して切り抜いていたので、紹介したい。写真は「読谷村総合情報サイト」から。

沖縄県読谷村、ガジュマルの木が茂る浅い谷の底に「チビチリガマ」はある。73 年前の沖縄戦で 83 人が「集団自決」に追い込まれた洞窟。その周囲に 1 月、高さ 1 ㍍弱の野仏 12 体が安置された。

うつむいたりほほえんだり、どこかとぼけた表情だったり。肉親相互が殺しあった場所の重みに過度なしかめ面を崩せずにいた私だが、つい表情が緩んだ。救われた。

彫刻家の金城実さん（79）がぐるり見渡し、つぶやく。いい場所になったねえ。事件が起きなかったら、こうはなっていなかった、そういう風にも考えられるねえー。

事件。昨年 9 月、ガマが荒らされ遺品は粉々にされた。県内の 16〜19 歳の少年 4 人が逮捕され「心霊スポットでの肝試し」だったと供述した。

野仏は、保護観察処分を受けた 4 人が作った。金城さんや遺族会会長の興那覇徳雄さん（63）らと一緒にセメントをこね、3 日間をかけた。

チビチリガマで何が起きたか。戦後 40 年近く遺族らは口を閉ざした。酒に溺れる人、自殺を図ろうとする人……。87 年、金城さんと遺族が共同制作した「世代を結ぶ平和の像」がガマの入り口に置かれたが、7 カ月後、右翼に破壊される。沖縄国体の読谷村会場で日の丸が焼かれたことへの報復で、現場に残されたビラには「国旗焼ヤス村ニ、平和早スギル」。遺族は再び心を閉ざし、像を埋めてしまおうという話まで出た。再建まで 7 年余の歳月を要した。

そんな歴史を何も知らずにやったという少年たち。被害者たる遺族は怒り、悲しみ、あきれ、でも、向き合った。

課題を出した。チビチリガマのことを調べてリポートを書くこと。そして、野仏。なぜ野仏？ 金城さんは少年にこう説いたという。「犯した罪は一生背負っていくしかない。でも、『申し訳ない』という気持ちで作った野仏が、その道のりに寄り添ってくれる。弔うのではなく、死者とつながるための野仏なんだ」

まだ子どもだし、いろんな事情も抱えてるんでしょう。同情はしません。ただ、話をしたり相談に乗ったり、関わり続けていくつもりですと、興那覇さん。「この子たちは、

逆に、平和を伝える一番手になれる。そう思ってます」

大丈夫。人は変われる―って、そのキラキラした自信はどこからくるんですか？

そう質問したかったけど、泡盛をヨーグルトドリンクで割って杯を重ねる金城さんと、忙しい、時間ないと言ってたのに、いつの間にか飲み始めていた興那覇さんがとても楽しそうに「これから」を語り合っていたから、聞きそびれてしまった。

「絶望しないですか？」

沖縄から戻って3日後、人に聞かれた。国会で朝日新聞が哀れだ惨めだと言われていた折。「ま、そういう気分になる時もありますよね」と応じ、〈特に最高権力者たる御仁の、被害者モードの言い散らかしには〉をのみ込んで、うん、でも絶望は全くしてないな、してらんないなと思った。

泡盛のヨーグルト割り。どんな味がするんだろう。

今度、飲んでみるか。

（2018年3月4日）